サンライズ・メイト・バートの広報誌
Rising Sun
Vol.119
令和6年2月25日発行
ライジング・サン
訪問介護・居宅介護支援事業所
サンライズ・メイト・バート株式会社
東京都足立区東綾瀬1－22－1　ル･ヴァン綾瀬1Ｆ
電話　03－5697－9895 FAX　03－5697－9896
発行人　代表取締役　井上明美

代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社
代表取締役　井上　明美

いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。寒暖差の激しい日々が続いておりますが、もうすぐそこまで春の装いが近づいて来てる今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。
今回は、この夏パリオリンピックを目指すフェンシング女子サーブルの江村美咲選手に注目しました。江村選手は身長1メートル70センチ、フットワークを生かしたロングアタックが武器で、去年7月の世界選手権では日本人初となる2連覇を果たし、世界の強豪あいてに、パリ大会の【金メダル候補】であることを強く印象づけました。また、新年に奉納した絵馬には『金メダルを日本に持って帰る』と記し、決意を新たに自身のトレードマークである金髪を束ね、黙々と練習に取り組んでいるようです。江村選手は急成長の理由を『楽しむ事』、『自分を信じる事』のキーワードでコメントしています。『楽しむ事は好きこそものの上手なれで、まずは競技自体を楽しむ事が重要であり、日々の練習が裏付けである自信。自分を信じる心であると考えます。東京オリンピックの時は、完全にチャレンジャーで、楽しむ事が出来ず、緊張で自身も持てないままでした』と。
4年に一度のオリンピックで金メダルを狙うという事は、【断固たる決意】が必要だと感じました。私自身も【断固たる決意】を持って、社会貢献、ご利用者様に寄り添おうと胸に深く刻みました。
まだまだ寒い毎日が続きますが、皆様くれぐれもご自愛ください。

サンライズの物語

人を愛し尽くされた―――
生きざまについて考える物語

その方は、ご主人様の担当ケアマネをさせて頂き永眠され10年程経った時に奥様が歩行困難になったとの連絡があり携わらせて頂いた方でした。
下町育ちのキップの良い親分肌の奥様でご主人が存命の頃から銀行の外交員が訪問しても食事を出したり、近所の知り合いの八百屋さんやお米屋さんに頼まれると沢山購入したりと義理人情に厚い人でした。
結婚当初はお姑さんや小姑の世話、農家の手伝いをし子供を育て、孫と一緒に海外旅行も何度もしていたのです。
ご主人の最期が居間で急変し奥様の腕の中で息を引き取ったこともあり毎回訪問すると「主人は幸せな人だった。私の腕の中で静かに眠ったのよね」と話されていたのでした。
そんな中奥様との別れは突然やって来たのです。ある晩お嫁さんから連絡がありお風呂で意識が無くなったとの事。緊急搬送されましたが意識は戻らなかったのでした。
少し前に奥様から連絡があり訪問した時に息子さんやお嫁さん、お孫さんへの感謝の話をされたのです。
お悔みに訪問するとご主人様との結婚式の写真が飾られており幸せそうな表情をされていたのです。ご家族に先日私が訪問した時に話された感謝の言葉を伝えると涙を零されておりました。
人が永遠の眠りにつく前の何か月前から予兆があると言われますが、きっと私を通して家族へ感謝の気持ちを伝えたのだと思います。
死に際がその方の生きざまと言われていますが、本当に人を愛し尽された奥様の人柄が弔問の人達の話から偲ばれました。別れは何度経験しても慣れる事はなく悲しい想いにかられました・・・

サンライズのデイサービス陽光だより

3月カレンダー工作

各自、折り紙でおひなさまを作り貼り付けてカレンダー工作をしました。

誕生日

誕生日カードを差し上げました。
皆さんで誕生日の歌を歌い
お祝いしました。

NEWS　今月のニュース

高齢者を癒やす老犬クック
盲導犬からキャリアチェンジ
長崎の介護施設に“勤務”

長崎県佐世保市赤崎町の介護施設「ケアハウスあかりさき」で、利用者から黄色い歓声を集める“優秀なスタッフ”がいる。ラブラドルレトリバーのクック（雄、12歳）。盲導犬を目指していたが進路を変え、約11年前から同施設で“勤務”している。人間に換算すると約90歳。同世代の利用者と触れ合い、癒やしを与えている。

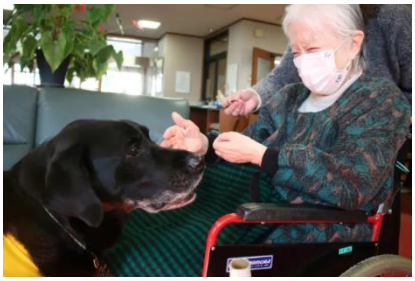
クックは適性などを踏まえて盲導犬以外の道を選択する「キャリアチェンジ犬」。九州盲導犬協会で訓練を受けていたが、皮膚のアレルギーがあったため、視覚障害者の負担になる可能性や、犬の健康、精神面も踏まえて進路を変えた。1歳半だった2013年3月ごろ、施設長の藤井陽子さん（56）がペットとして個人で引き取り、一緒に“通勤”するようになった。

日課は利用者との触れ合いと来客の出迎え。利用者が名前を呼ぶと、しっぽを振りながら近づき、そばに座ったり、利用者の顔を見つめたりしている。来客が訪れると、座って出迎える。

利用者が食事をする部屋に入らないなど、ルールは必ず守る。飛び付くこともなく「人が大好きで、おとなしい子なんです」と藤井さん。人付き合いが苦手な利用者がいたが、クックが寄り添うと徐々に心を開き、他の利用者らともコミュニケーションが取れるようになったという。

温厚な姿のとりこになった利用者も多く、10人ほどで「クック応援隊」を結成。その一人、天野廣美さん（82）は「クックは心のよりどころ。会えると心があたたかくなる」とほほ笑む。同年代でもあり「クックが生きているうちは、頑張って生きたい」と目を輝かせた。

盲導犬とは異なる道を歩んだが、約50人もの利用者やその家族など大勢を癒やし、愛される存在になった。「この生活が向いているのかなと思う。クックにも私たちにとっても、一番幸せ。これからも互いに寄り添っていきたい」。静かに語る藤井さんを、クックが優しいまなざしで見つめていた。



名前を呼ばれ近寄るクックと、笑顔を浮かべる天野さん＝佐世保市、ケアハウスあかりさき

＜長崎新聞　24/2/16（金）＞

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。http://www.samaba.jp/back-number/